

鶴見大学図書館新収、天海版『金七十論』について

鶴見大学図書館蔵天海版『金七十論』の特徴。

- ①天海版一切経であること。
- ②天海版なのに、冊子体であること。
- ③長い伝来があること。
- ④内容が、『金七十論』という珍しい本であること。

①天海版であること。

天海版(天海)が發願し、徳川家光の援助を得て寛永十四年(二毛)より慶安元年(二箇)にかけて刊行した日本最初の「一切経」のこと。天海版「一切経」は、倭蔵、寛永寺版ともいう。天海は寛永二十年に没するが、公海等遺弟の尽力で完成する。それは家康二十三回忌の慶安元年で、四月十七日家康の神前に報告がされ、この時あわせて、天海に慈眼大師の号を追贈した。底本は宋慈溪版蔵経で、一部は元杭州版と明万曆版を用い、木活字を使用する。一紙二十四行、一行十七字、六行ごとく少し広めに行間をとり、装訂を折本とする。一部に袋綴じ本あり。第十二行と第十三行との間の版心には經典名と千字文巻次と丁数を記す。巻末目録によれば、六六五函一四五三部六三二巻というが、実際には巻末目録を含め一四五四部五七八一巻。帖数は五七七一帖。巻末目録中に記す巻数の総計は五七九二巻。函数は、書院本、觀山文庫天海蔵本とも六六五函であるが、經典函次は前後にずれている。毘沙門堂本の経は二九〇の函に入る。また各函の経名や配列順序が目録と違ふことなどから、巻末目録は最後に出版されたものの刊行予定目とも考えられる。完成を急いだためか、『華嚴經(四十卷本第十九卷)』、『仏説七俱胝仏母准提大明陀羅尼經』第一巻にはそれぞれ本文一紙分の白紙があり、原本に落ちたことが推定できる。一蔵に本文のみで全二二万二四一紙を必要とし、三十余部が摺られたという。慶安元年には他に普通院や東西両本願寺などに納入されたことが記録されているが、本團寺本はそれから三十五、三十九年後の天和から貞享年間(二六八)にかけての経師たちの墨書があり、摺印すくにはすべての製本が行われなかったことが判明する。紙について、毘沙門堂本の内側には『過去現在因果経』等の宗存版蔵経と、寛永寺文書などの改訂紙を一部使用する。願文刊記総数は全三〇一件、寛永十四年は四件であったが、翌年より順に八件、五

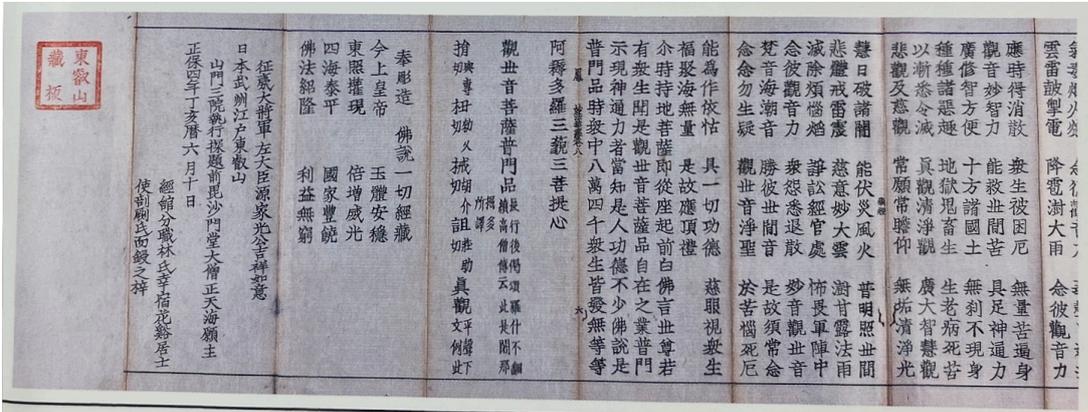
井上宗雄等編
『日本古典籍書誌学辞典』
(岩波書店、1999年)

五件、四件、五件、二件、一件、三十三件、五十三件、五十三件、四十三件、八件と推移する。天海没後に刊記数が増加する。願文を二分すれば、正保二年(二箇)を境に、徳川家光が対する政運長久から吉祥如意へと転換していくことがわかる。後印本(註)として寛政年間(二六二)の重刻序を持つ本や、天保年間(二六〇)の刊記を有する本などがある。寛永寺に今も所蔵されている木活字や整版などの調査による寛永寺蔵版の全容、底本とその所蔵寺院の特定、現存摺本の調査など今後の課題も多い。(松本知恵)

【参考文献】野沢佳秀『天海版大蔵経の底本に関する諸説の再検討』『立正史学』77、平成7年3月。松本知恵『天海版一切経の目録について』『印度学仏教学研究』44、平成8年3月。



②天海版なのに、冊子体であること。

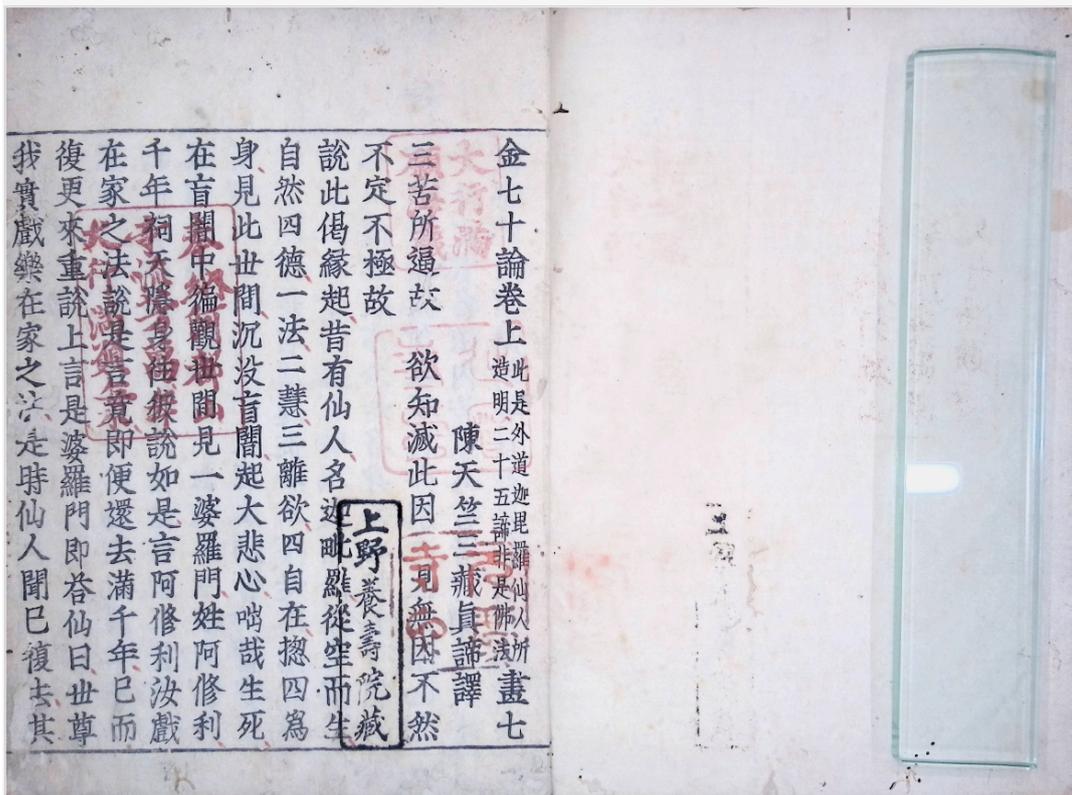


← 蛇腹折りに折つてある (折本装)。

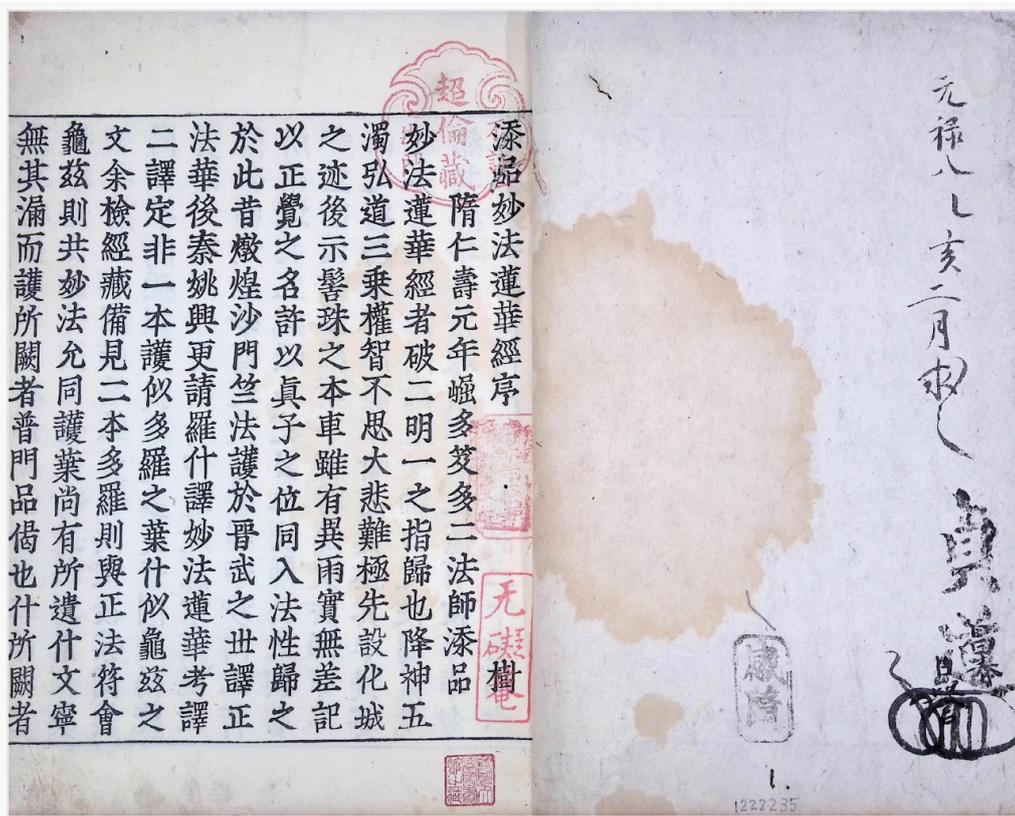
天海版は通常は蛇腹折りに畳んだ料紙に表紙を付けた折本装 (1紙24行 行17字 毎半折6行)

2026年2月28日

○鶴見大学図書館蔵新収本、天海版『金七十論』（古活字版、袋綴装）



○鶴見大学図書館蔵、天海版『添品妙法蓮華經』（古活字版、冊子体。請求記号：183.3/H/8）

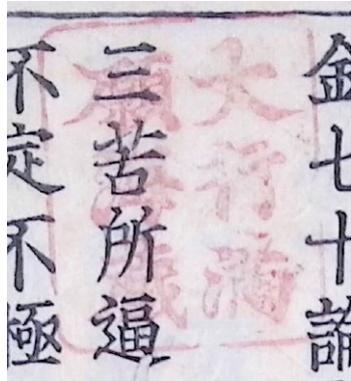


③長い伝来があること。

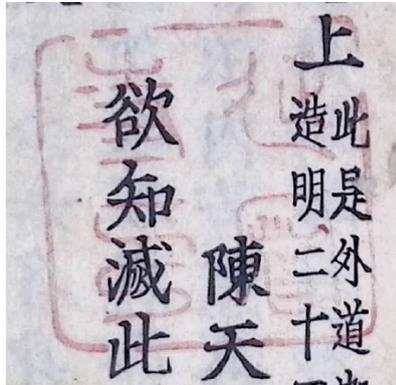
天台宗の僧願海 → 滋賀県の明王院 → 宝玲文庫 → 鶴見大学図書館

【蔵書印】

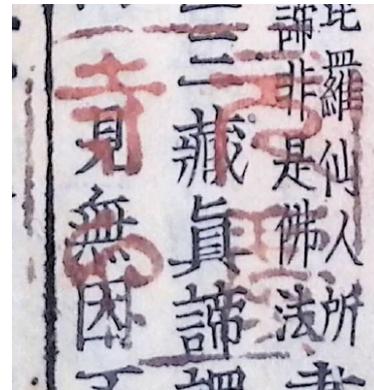
「大行満願海蔵」



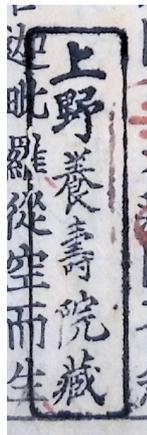
「延暦寺印」



「元慶寺印」



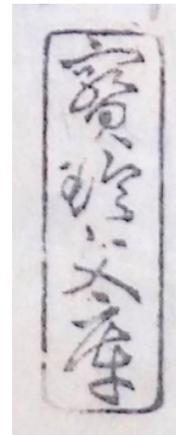
「上野養寿院蔵」



「奉納阿都山寺流芳万年大行満願海」



「宝玲文庫」



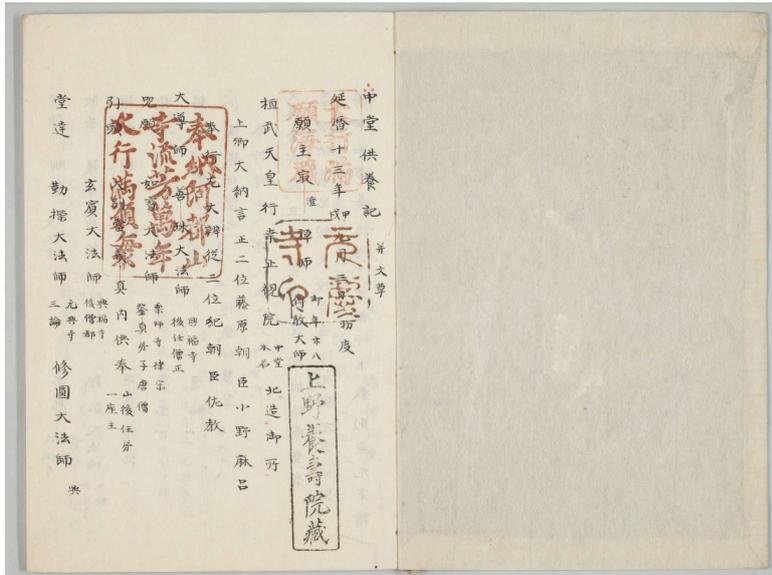
【願海の蔵書】

○『付喪神絵巻』 写本、2巻。（「延暦寺印」・「上野養寿院」の蔵書印なし）



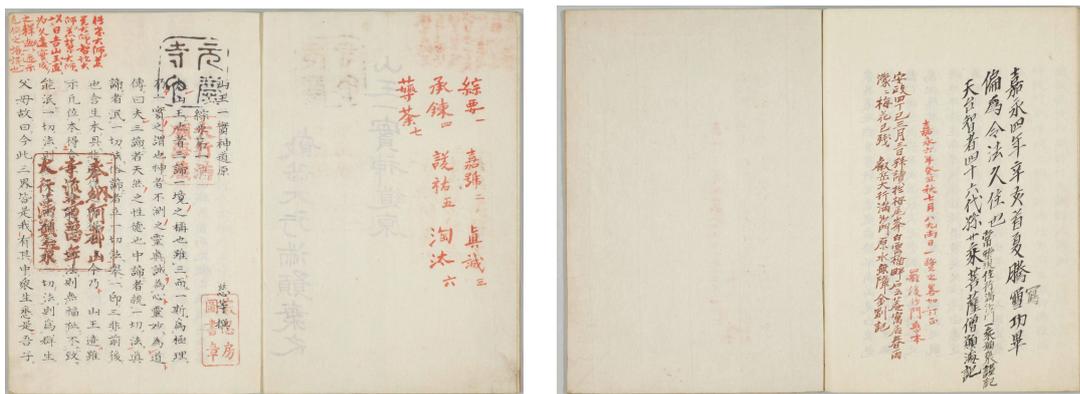
(京都大学貴重資料デジタルアーカイブ、URL : <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013599?page=2>)

○『中堂供養記』写本、1冊。（「延暦寺印」なし、「上野養寿院」、「元慶寺」印あり）



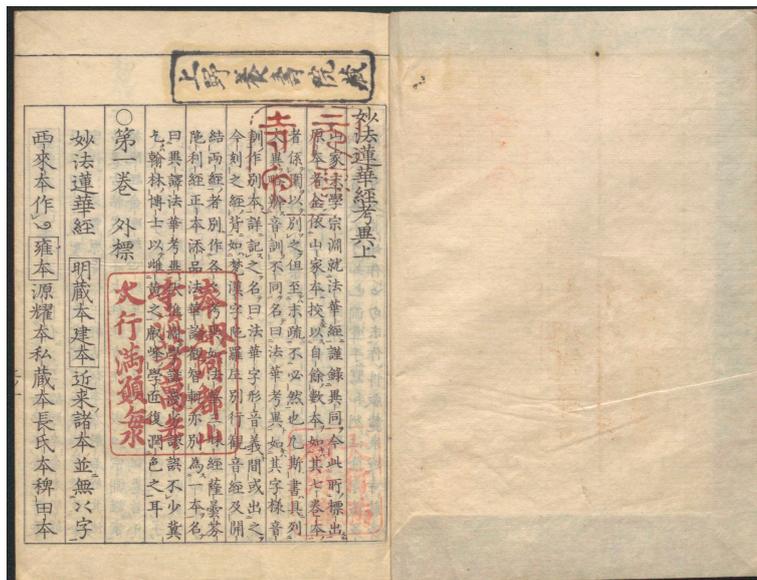
(四天王寺大学図書館恩頼堂文庫、国書データベース、DOI:https://doi.org/10.20730/300001395)

○『山王一実神道原』写本、1冊。（「上野養寿院」印なし、「延暦寺印」「元慶寺印」あり）



(四天王寺大学図書館恩頼堂文庫、国書データベース、DOI:https://doi.org/10.20730/300001393)

○天保 11 年頃刊『法華經考異』上下巻 2 冊



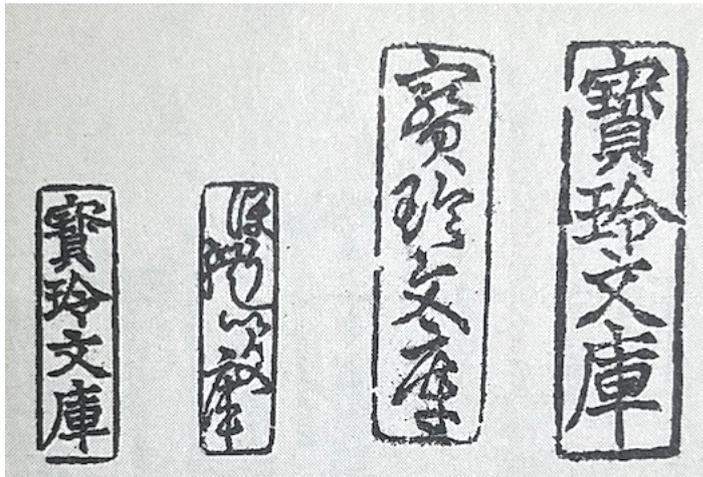
(四天王寺大学図書館、恩頼堂文庫、国書データベース DOI:https://doi.org/10.20730/100442472)

○「宝玲文庫」

フランク・ホーレー

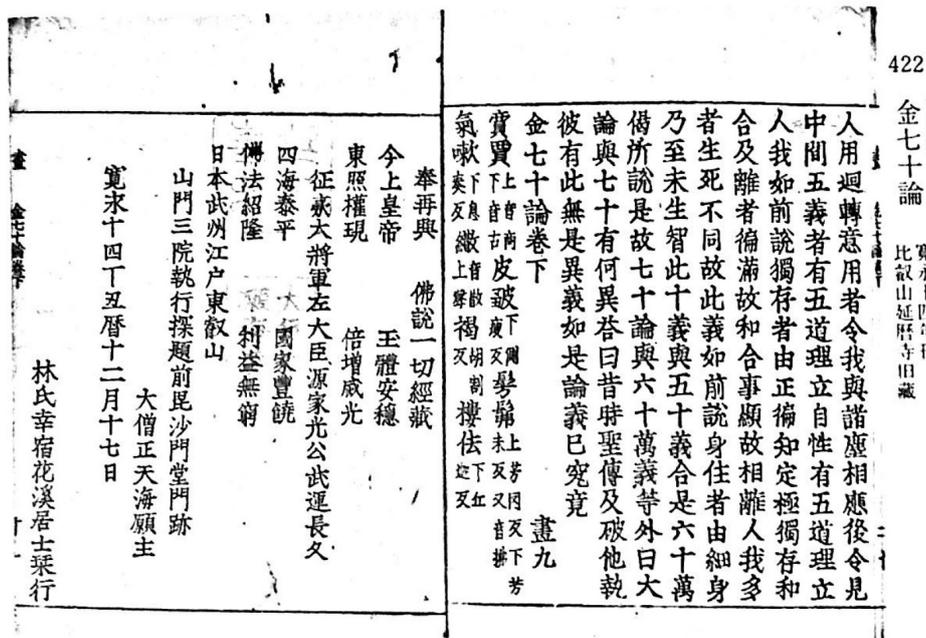
明治39年～昭和36年。

イギリス人。言語学者、教育者、ジャーナリスト。昭和6年(1931)来日。1940年に反日活動家と嫌疑をかけられ本国に送還されたが、戦後46年にジャーナリストとして再来日した。一万数千冊の古典籍を幅広く収集し「宝玲文庫」を形成した。現在その多くは散逸しているが、ハワイ大学には琉球関係資料、天理大学には和紙資料がまとまって入っている。反町茂雄(弘文荘)とも親しかった。



○弘文荘のカatalog

うっすらと、「延暦寺印」と「大行満願海蔵」印が見える。虫損の位置もよく似る。



(反町茂雄編『弘文荘待賈古書目』第42号430ページ、弘文荘、1972年)

○弘文荘 反町茂雄

反町茂雄（1907-1981）（蔵書・蔵書家）
 昭和期の古典籍商。明治三十四年新潟県長岡市生れ。平成三年没、九十歳。昭和二年三月東京帝国大学法学部政治学科卒業、神田の古書店一誠堂書店に住込店員として入店、昼夜精進、半年を経ないで頭角を現し、主人の信用を得て番頭格となる。目録販売、学校廻りなど積極的に営業を進め、業績を向上させた。昭和三年十二月、若き天理教信長中山正善が初めて来店、洋装本などを大量に買い上げ、一生を通じて最大の顧客となる。昭和四年林忠正の遺品を古書仲間から売立して十二月に九条家本の売立立てに池田龜鑑から受注したことから、古典籍の世界を認識し、独学で古代から近代までの書物、古文書などを幅広く勉強して典籍の価値を調査、価格を付けて専門の商いとする。独立後もホレー文庫、小丁（び）文庫など多くの売立を立てて主催する。水谷不倒の古版本零葉を主人より譲り受け、店員の勉強会である玉雨会を結成して配布。後に訪書会、和本研究会、文書の会などを組織して、零葉集の編集、書物・営業研究を行い、業界の若手を育成する。

弘文荘として昭和七年独立、「店をもたない、借金をしない、人を雇わない、平凡な本は扱わない」の営業方針で和古書の目録販売を中心として、洋古書販売出版の二本柱で営業を始める。昭和八年、古本屋業の本質検討を業界誌に執筆、その後、業界、蔵書家、書物のことなど生涯三百編を執筆。昭和八年五月、古書販売目録「弘文待黄古書目録」を創刊、昭和五十二年第五十号まで刊行、また特集目録「展覧即売会目録」、その他の販売古典籍を含めると生涯に約三万点の典籍を扱う。目録は、丹念な解説と写真の掲載により、購入者の信頼を得た。昭和二十二年に森統三が弘文荘へ入社するに及んで調査がさらに行き届き、反町の古典籍に対するひたむきな研鑽と併せて、戦後の混乱期に諸家から流出した貴重書が目録に掲載され、学術的な

評価を得ている。特に貴重な書物には月明荘という数種の印を押捺する。納品後に国宝、重要文化財に指定された古典籍は百点余に上る。

昭和十二年古書業界の古典籍を扱う書林定市会（東京古典会の前身）の幹事に選ばれ、市会の運営方法などを若手と図って公平な運営に改革、その後古書組合の専務理事、戦後は東京古典会、明治古典会の幹事、会長などを歴任、新しい方策を次々と打ち出し業界の活性化と顧客の掘り起しを行う。東京美術倶楽部の会員にもなり古典籍仕入れのルートとする。戦前、戦後を通じて古書業界の改革、組織編成、顧客拡大などに尽力した。

またフランク・ホレー、ハイド、大英図書館など多くの海外の個人コレクター、機関も顧客とし、日本古典籍への理解を世界に広めた。昭和四十年から毎年世界各国の貴重書を所蔵している図書館などを訪れ、日本の古典籍と諸外国の古典籍の比較考究、海外にある日本の古典籍の調査を行い、いくつかの目録編集を自費で行う。またサザビーズ、クリスティーズなどの日本古典籍が出品されるオークションにも参加、貴重書を日本にもたらす。これらの成果を、世界的にみれば日本古典籍の特徴などとして発表、新しい視点から日本の古典籍をとらえる。

平成二年大英図書館後援者会名誉会員、平成三年東京都文化賞受賞、ケンブリッジ大学日本研究科に反町メモリアルルームが設けられる。同年九月に九十歳で没するまで東京本郷にて一流の古典籍商として営業する。（八木社）

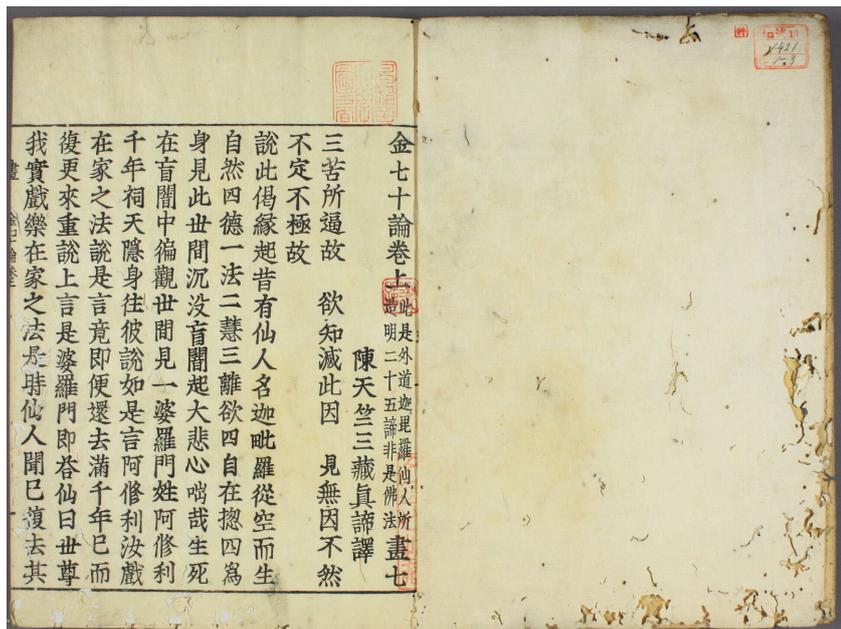
【参考文献】反町茂雄「古書肆の思い出」全5巻、平凡社、昭和61年。平成4年。同「天理図書館の善本稀書」八木書店、昭和55年。同「日本の古典籍」その面白さ、その難さ、八木書店、昭和59年。同編「紙魚の音がたり」昭和編、八木書店、昭和62年。同「紙魚の音がたり」明治大正編、八木書店、平成2年。鈴木徳三編「待黄古書目録索引」八木書店、昭和63年。文書の会編「刊」弘文荘反町茂雄氏の人と仕事、平成4年。同「反町茂雄文集」上下、平成5年。

井上宗雄等編『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店、1999年）

④内容が、『金七十論』という珍しい本であること。

『金七十論』・大蔵経（一切経）に収載されているが仏典ではなく、古代インドの哲学書。今日までほとんど顧みられたことはないが、日本の、近世にだけ注目され、研究が進んだ。当該書は日本において冊子体版本として最も早い例か。

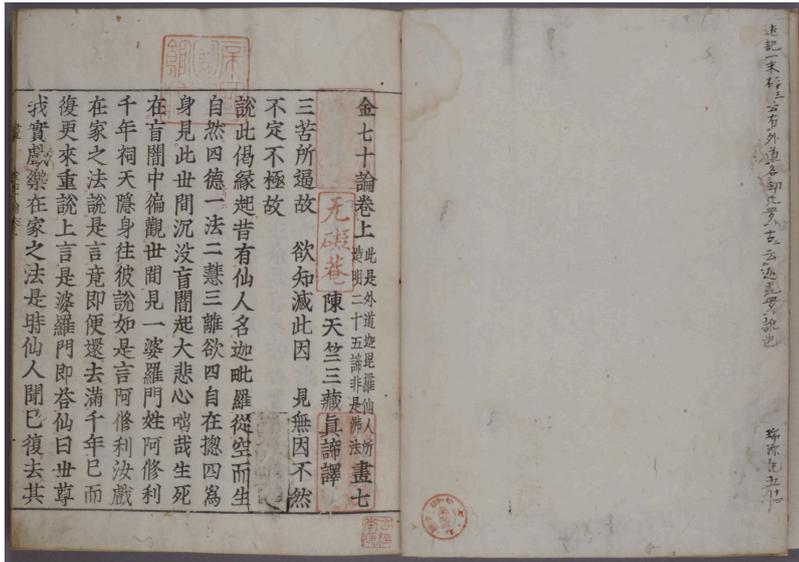
○早稲田大学書蔵、天海版『金七十論』冊子体



（請求記号：ロ 10 01421 早稲田大学古典籍データベース URL：https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ro10/ro10_01421/）

2026年2月28日

○国立国会図書館蔵、天海版『金七十論』冊子体（「無礙菴」の印あり）



(国立国会図書館デジタルコレクション 永続的識別子: info:ndljp/pid/1288176)

○成篁堂文庫にも天海版『金七十論』冊子体の所蔵あり？

金七十論／三卷一冊／寛永十四年刊。天海版一切経の内。古活字版。内野皎亭旧蔵。

川瀬一馬編『お茶の水図書館蔵新修成篁堂文庫善本書目』（お茶の水図書館、1992年）692ページ

【参考文献】

馬場久幸『日韓交流と高麗版大蔵経』法蔵館、2016年

高崎新聞記事「高崎名僧列伝」

<http://www.takasakiweb.jp/takasakigaku/article/02/05.html> (2028年2月25日閲覧)

逸木盛照『冷泉為恭：為恭と願海の生涯』

(中外出版、大正14年刊／国立国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/pid/1020403/1/88>)

横山學著『書物に魅せられた英国人：フランク・ホーレーと日本文化』

(歴史文化ライブラリー163、吉川弘文館、2003年)

朝日新聞社編『寛永寺；増上寺』（朝日ビジュアルシリーズ；仏教新発見29号、2008年）